

◇ 第7回年次大会開催のお知らせ

2015年9月6日(日) 13:00~17:50 於日本大学芸術学部江古田校舎 西棟 W-303 教室

西武池袋線 江古田駅北口下車2分。池袋方面に向かって直ぐです。校舎案内につきまして  
は <http://www.art.nihon-u.ac.jp/about/showcase.html> をご参照下さい。

今大会では若手とベテラン会員による大変興味深い研究発表と連続シンポジウム「学問的知見を英語教育に活かす」を行うことになりました。「欧米言語文化」を標榜する当会にふさわしく、英米文学・比較文学・英語教育学・英語学にわたる多彩な内容になっております。

連続シンポジウムは、文字通り英語学・英語教育学・英文学の研究成果を教室に還元しようとするもので、専攻分野を問わず、英語を教えておられる先生方にとって、直ぐに役立つメソッド（使える教授法）なども紹介しております。発表内容につきましては各領域の専門的知識があることを特に前提としておりません。皆様の多数のご来場を心よりお待ちしております。

<プログラム>

○ **開会の辞 (13:00)**

欧米言語文化学会会長 植月恵一郎

○ **研究発表 (13:10~15:20)**

司会 日本大学教授 植月恵一郎

「江戸川乱歩作品に見る、E.A. ポオからの影響——踏襲点と差異について——」

日本大学大学院 高野 和彰

司会 早稲田大学非常勤講師 田村 裕二

「古典作品の継承者として——Cynthia Ozick の *Heir to the Glimmering World*」

東京電機大学専任講師 大森 夕夏

司会 和光大学非常勤講師 奥井 裕

「小説論に見るジョージ・オーウェルのアメリカ観」

日本大学助教 近藤 直樹

○ **連続シンポジウム「学問的知見を英語教育に活かす」 (15:30~17:20)**

[司会] デジタルハリウッド大学教授 大石健太郎

「大学の英語教育におけるアウトプット力向上方法」

[発題者] デジタルハリウッド大学准教授 江幡真貴子

[司会] 日本女子体育大学准教授 加賀 岳彦

「動詞と後続する名詞句の“秘密の関係”を暴露する」

[発題者] 日本赤十字看護大学准教授 川崎 修一

○ **総会 (第29回通常総会. 17:30~17:50)**

- ・本部活動報告
  - ・関西支部活動報告
  - ・会計報告
- 司会 欧米言語文化学会幹事長 水野 隆之  
欧米言語文化学会幹事長 水野 隆之  
欧米言語文化学会幹事・関西支部幹事補佐 吉田 一穂  
欧米言語文化学会会計局長 近藤 直樹

○ 閉会の辞 (17:50) 欧米言語文化学会監査役 小林 英美

○ 懇親会 (18:30 ~20:30)

於 イタリアン・カフェ PEACE (ピース) 会費 4,000 円 (昨年と会場が異なりますのでご注意ください)

〒 176-0004 東京都練馬区小竹町 1-57-2 TEL 03-5966-1567

アクセス：江古田駅北口から右に進み（＝日芸に向かって）最初の交差点を左に曲がってすぐです。または大学を出た信号交差点を北に上がってすぐです(江古田駅から 108m)。

## 研究発表要旨

「江戸川乱歩作品に見る、E.A.ポオからの影響——踏襲点と差異について——」

高野 和彰

江戸川乱歩(1894-1965)の作品には、欧米諸国の文学(とりわけ探偵小説)からの影響が強く見られることが知られている。中でも最も強い影響を受けたと言えるのが米国の作家エドガー・アラン・ポオ(Edgar Allan Poe, 1809-1849)である。ポオが残した探偵小説的要素を持つ作品は『モルグ街の殺人』(*The Murders in the Rue Morgue*, 1841)、『マリー・ロジェの謎』(*The Mystery of Marie Rojet*, 1842-1843)、『盗まれた手紙』(*The Purloined Letter*, 1845)の「デュパン三部作」に加え『黄金虫』(*The Gold Bug*, 1843)『「おまえが犯人だ」』

(*Thou Art the Man*, 1844)の五作品が挙げられる。このいずれもが、乱歩の作品に多大な影響を及ぼしていることは既に多くの先行研究などによって言及されてきた。

今回は、暗号解読に主眼を置き、乱歩の実質的な処女作である『二銭銅貨』(1923)とポオの『黄金虫』に改めて注目し、乱歩がポオから踏襲した探偵小説的要素を精査し、どのような解釈を経て日本的探偵小説の礎を生み出したのかを考えたい。

『黄金虫』は暗号解読に主眼を置いてはいるものの、冒険小説的側面も備えており、且つ明確に解決されない謎が残されるという形式を取っている。また、主人公の一人称形式を持って書かれている。対して乱歩の『二銭銅貨』は主人公の一人称形式で暗号の発見から解読までの流れが描かれているが、終盤になり視点が主人公からもう一人の登場人物に変わるといった点が異なっている。また、この視点変更により、暗号に関する謎の解決が読者に示されるという形式を取っており、作品を通して解決されないまま謎が残るといったことは回避されている。これらの差異を中心に考察を進めていきたい。

また、乱歩はポオの怪奇的・幻想的・論理的な作風の全てを評価しており、探偵小説的要素以外の面でも多大な影響を受けている。その一例として、乱歩の『パノラマ島奇譚』(1926)とポオの『アルンハイムの地所』(*The Domain of Arnheim*, 1847)が挙げられる。『アルンハイムの地所』では、全能な神によって創造された自然を元に、人間の造形を加える

ことで超人間的自然を生み出すという物語が描かれている。対して、『パノラマ島奇譚』では、同じく自然を元にしながらも、人間的な人工物を敷き詰め、自然には存在し得ない怪奇な(或は醜悪な)生物(という名目の人間)を創造し配置することで、一種の「見世物小屋」的な空間を形成するという物語となっている。この二作品を対比し、どのような同化／異化が見られるかを精査したい。その上で、乱歩の目指した美的な世界観や美のベクトルが、ポオの持つベクトルとは違うということについて考察したい。

### 「古典作品の継承者として——Cynthia Ozick の *Heir to the Glimmering World*」

大森 夕夏

現代ユダヤ系作家 Cynthia Ozick の *Heir to the Glimmering World* (2004) は、19 世紀英文学の古典作品を想起させる個所が作中随所に散見され、古典作品のモチーフのパスティーシュと言いうるほどである。Charlotte Brontë、Henry James、George Eliot など、彼女が影響を受けた作家たちの作品を始めとして、Winnie-the-Pooh のモデルである Christopher Robin Milne の実人生も下敷きとされている。しかし、Ozick がその文学論の中で、実験的小説におけるパロディの限界について言及しているように、彼女の作品を単なるパロディと呼ぶことはできない。Suzanne Klingenstein の言葉を借りれば、この作品の形式は、トーラー(モーセ五書として知られている、聖書の最初の 5 冊)の解説書であるタルムードのように、古典作品に対する彼女の解釈のパスティーシュとも見做しうるのである。そこで本発表では、彼女の文学観に照らし合わせながら作中における「解釈」に着目し、古典作品を継承するものとしての本作品の在り方を検証したい。

### 「小説論に見るジョージ・オーウェルのアメリカ観」

近藤 直樹

イギリスの文学作品を「トランス・アトランティック」に、すなわち、大西洋を挟んだ国々との関係を視野に入れて読み直す作業は、特に 2000 年代以降、さかんになっている。とりわけ英米関係については、個別の文学者の作品を二国間の関係の中で捉え直す作業が多く行われ、大きな成果が生まれている。しかし、ジョージ・オーウェル(George Orwell, 1903-50)についての作業は、その重要性にもかかわらず、いまだ開拓の余地があると思われる。発表者は、オーウェルのエッセイや小説を、20 世紀前半の英米の歴史・文化・政治的關係を視野に入れて幅広く詳細に分析し、オーウェルのアメリカ観や、アメリカにおけるオーウェルの受容を洗い出す作業を進めていきたいと考えており、本発表はその一環となることを目的とする。具体的には、アメリカの大衆小説や純文学小説に対するオーウェルの見方を、彼の作品や、当時のイギリスの文化思潮を分析することで明らかにし、そこから彼の(特に 1940 年代の)アメリカ観を探る予定である。

## 連続シンポジウム「学問的知見を英語教育に活かす」

### 本シンポジウムの趣旨

鴫崎 敏彦

学会の存在意義の一つに社会貢献があることは論を俟たない。そして、当学会が守備範囲としている諸分野の研究活動を社会に還元する有効な手段の一つに、その研究成果の英

語教育への応用が挙げられることも、多くが認めるところだろう。そこで、最近の英語教育の動向に目を向けてみると、コミュニケーション能力が重要視されており、とにかく「慣れる」ことで英語力を育成しようとする傾向にあるように感じられる。もちろん、「慣れる」ことは大切であるし、英語をツールとして使えるようにならなければ、学習する意味がないのも当然である。

しかし、限られた時間の中で効率よく英語力を身に付けるためには、「慣れる」だけではなく、きちんと「理解」することも重要であることは間違いない。その「理解」を促す過程で、最新の研究成果はもちろんのこと、概論レベルの知識であっても、授業者の工夫次第で、学問的知見を活かすことは十分に可能であると考えている。本シンポジウムでは、「学問的知見を英語教育に活かす」というテーマのもと、各発表者が、各々の専門分野における英語教育に活かすことのできる学問的知見や、その知見を活かした教授法について取り上げる。

#### 発題者6

##### 「大学の英語教育におけるアウトプット力向上方法」

江幡真貴子

アウトプットに重点を置く1年生のProductionのSA(最上級)の授業と、4年生のゼミ補助科目(英語ゼミ)の授業を紹介する。アウトプット、特にスピーキング力向上のために必要な要素とは何かを考え、また、いかに授業内外でそれらの要素を使用し、学生の英語アウトプット力向上につなげているのかを発表したいと思う。

#### 発題者7

##### 「動詞と後続する名詞句の“秘密の関係”を授業で暴く」

川崎 修一

理論言語学の知見の一つとして、動詞と後続する名詞句（便宜上、目的語と言う代わりにあえてそうしておくが）には目に見えにくい“ある関係”が存在すると数十年前から指摘されてきた。そして、この関係は少なくとも英語においては一般的な性質であり、様々な「構文」の意味や使用上の制約に深く関わっていることを示唆する研究結果も多く存在している。その一方で、これについて語ることは教育上不適切（あるいは無意味）であると考えられたかどうかは定かではないが、学生の眼前で暴露し教育上の効果の有無を検証（あるいは反証）するといった試みは、少なくとも管見の限りにおいてはほとんど存在せず、専門外の教員や学生に対しては、いわば“秘密の関係”となっている感は否めない。そこで本発表では、このアヤシイ関係について様々な「構文」の実例を挙げながら実証的に検討した上で、教育上の有益性（と同時に課題）について議論したい。